

広がる! 子どもの居場所づくり

徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドラインを作成した「徳島県子どもの居場所づくり推進会議」の一委員であり、子ども家庭福祉(児童福祉)を専門とする、鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授の木村直子さん(43・京都府出身)に、「子どもの居場所」の役割や目標を尋ねた。

「子どもの居場所」とは、どのような場所ですか。

近年、子どもを取り巻く環境は厳しくなっています。社会環境の変化や家庭環境の多様化が進んだことで、子どもたちが経験できる身近な関わりの絶対数が少なくなりました。また、地域の空き地や公園な



「鳴門教育大学 子ども未来応援プロジェクト」の学生メンバーも参加し制作した、子どもの貧困や居場所づくりについてのパネル(徳島県・徳島県社会福祉協議会・鳴門教育大学)。

どで、以前のように子どもたちだけで安全に遊ぶのも難しくなっています。このような状況で、健やかで力強い子どもを育てるためには、家庭や学校だけでなく、地域のマンパワーが必要。それを実現するのが「子どもの居場所」です。

どんな役割があるのでしょうか。

家庭でも学校でもない「第3の居場所」という役割があると考えています。例えば、家庭の中でホッと安らげない、子どもらしくいられない子どもたちが、のびのびといられる場として「子どもの居場所」があればいい。いろんなところに「ここにもいい」と思える場があることが、大きな救いになると思います。「子どもの居場所」の強みは、設置目的や運営方針の縛りが少なく、自由度が高いこと。目的や活動が異なる多様な居場所をつくれるので、様々な子どもや家族が集えます。

令和元年に、徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドラインが策定されました。その後、どのような変化がありましたか?

ガイドライン策定以前から、有志の方が地域課題のニーズに応える場をつくられていました。策定によって、県内に点在している場が繋

がりあい、線になり、そして面としてネットワークの網となりはじめています。新たな居場所が開設されたり、居場所を運営されている方同士が支え合ったり。よい仕組みができつつあると思います。

木村さんがいらっしゃる鳴門教育大学では、どのような取り組みを行っていますか。

令和元年に「鳴門教育大学 子ども未来応援プロジェクト」を立ち上げました。学生有志が、子ども食堂や子育て支援の場でボランティアをしたり、学内外で居場所のPR活動をしたり。一緒に楽しみながら学ばせてもらっています。学生自身も、普段は大学の近くで点のように暮らして

いる人が多い。居場所に出向いて、一人の市民として地域の方々や子どもたちと交流することで、緩やかな繋がりを実感しているのではないのでしょうか。

「子どもの居場所」に課題はありますか。

継続的に実施する資源の確保です。具体的には、場所、資金、人材の3つ。なかでも大事なのが人材で、手伝ってくれる人を集めたり、引き継いでくれる人を探したりして、次の担い手を育てることが求められて



官民学連携で様々な活動に取り組む木村さん。「居場所が、その地域で暮らす人々の生活に自然に組み込まれているような場になることを目指しています」。

ます。そのために必要なのは、行政による養成はもちろん、地域で行われている小さな活動を段階的に広げていくための支援や、先進的な居場所のノウハウの伝達など。居場所の活動に参加してくれた人に、少しずつバトンを繋いでいけたらと思います。

「子どもの居場所」のこれからの展望を教えてください。

地域にとって、あたりまえの存在になることを目指しています。理想は各校区に一つ。子どもが一人でも出かけられる距離にあればと思い

ます。そして「子どもの居場所」は「みんなの居場所」でもあるんです。実際に、今ある「子どもの居場所」は、子どもだけでなく誰もが集える地域の場所のノウハウの伝達など。居場所の活動に参加してくれた人に、少しずつバトンを繋いでいけたらと思います。

す。そして「子どもの居場所」は「みんなの居場所」でもあるんです。実際に、今ある「子どもの居場所」は、子どもだけでなく誰もが集える地域の場所のノウハウの伝達など。居場所の活動に参加してくれた人に、少しずつバトンを繋いでいけたらと思います。

子どもの豊かな育ちを願って、県内の各地域で「子どもの居場所」づくりが広がっている。令和元年に、徳島県「子どもの居場所」づくり推進ガイドラインが策定され、県や市町村、関係団体が連携し、協力して運営していく取り組みが進んでいる。さまざまな立場で「子どもの居場所づくり」に携わる人に話を聞いた。

令和元年、徳島県社会福祉協議会に設置された「子どもの居場所づくり推進コーディネーター」。こちらではどんな活動をしているのか、主任コーディネーターの金平和江さん(53・美馬市出身)に話を聞いた。

推進コーディネーターはどのような役割を持つのでしょうか。

「子どもの居場所」という、食事を提供する「子ども食堂」をイメージする方が多いかもしれませんが、「子どもの居場所」は、子どもたちが地域の大人と交流できる安全で安心して過ごせる場であって、そこに集まって宿題をしたり、一緒に遊んだり、地域の大人と交流したりと、地域の実情によって様々なスタイルがあります。そこに集う子どもたちは、たくさん地域の人と出会い、経験する時間を持つことで、様々な困難や課題を乗り越えていく力を身につけることにも繋がります。

その場は、話し相手や仲間がいる地域の憩いの場所で、世代を越えて、ほっとできる安らぎの時間を過ごせる地域に開かれた交流の場となっています。推進コーディネーターは、そんな「子どもの居場所」をつ

徳島県における「子どもの居場所」について、現状を教えてください。

徳島県が本格的に「子どもの居場所」づくりに取り組みはじめた平成30年度当時、県内では定期的に開催される10か所の「子ども食堂」の他に、「放課後子供教室」や「地

徳島県における「子どもの居場所」の定義

「子どもの居場所」とは、地域の大人との継続的な交流ができる、子どもたちにとって安全で安心な居場所であり、信頼関係のもとでの様々な活動を行う中で、すべての子どもたちが夢や希望をもって健やかに成長していける場である。原則として、18歳に満たないすべての子どもや家庭を、地域で見守る子どもたちの居場所である。

域未来塾」における学習支援が地域の実情に合わせて実施されています。徳島県では、民間主導による取り組みを県内各地域に拡げるために、「子どもの居場所」づくり推進ガイドラインが策定されるとともに、相談窓口を開設して私たちコーディネーターを配置し、県民、関係団体、行政機関が連携・協力して、持続可能な仕組みづくりに取り組んでこられました。コロナ禍においても、地域の拠点として「子どもの居場所」は、浸透・拡充されています。

「子どもの居場所」を拡充するために取り組んでいることは

徳島で「子どもの居場所づくり」

推進の本格的な取り組みがはじまって今年で3年目。今後、それぞれの居場所で、今ある取り組みをいかに継続・発展していただくか。そして、県内各地に地域の拠点をさらに拡充できるかが重要となってきます。「子どもの居場所」の必要性をさらにたくさんの人に知っていただくため、各団体の活動内容やマニュアルなどをまとめた冊子を作成し、ホームページに掲載するなど情報発信にも力を入れています。

また、子どもの居場所を運営するなかで、同じような悩みを抱えられて

いる方も少なくありません。これから、相談や、意見交換ができる機会を設けていきたいと思っています。関係者の横のつながりを強くしていくことは、とても大切なことだと考えています。

最後に、子どものために何かしたいと思っている方へのメッセージをお願いします。

「子どものために何かしたい」という気持ちがとても大切です。最初は「私でもできるのかな」と躊躇するかもしれませんが、まずは一歩を踏み出して、できることから継続してやっていくことが大切です。行動を



「子どもの居場所がどんどん広がっていくように活動していきたいです」と金平さん。

起こすことで同じ思いを持つ地域の仲間が集まってきたり、協力者が出てきたりすることもあります。ぜひ、私たちにもご相談ください。

最後に、子どものために何かしたいと思っている方へのメッセージをお願いします。

「子どものために何かしたい」という気持ちがとても大切です。最初は「私でもできるのかな」と躊躇するかもしれませんが、まずは一歩を踏み出して、できることから継続してやっていくことが大切です。行動を

最後に、子どものために何かしたいと思っている方へのメッセージをお願いします。

「子どものために何かしたい」という気持ちがとても大切です。最初は「私でもできるのかな」と躊躇するかもしれませんが、まずは一歩を踏み出して、できることから継続してやっていくことが大切です。行動を



(左から)子どもの居場所づくり推進コーディネーターの金平さんと前野さん。

起こすことで同じ思いを持つ地域の仲間が集まってきたり、協力者が出てきたりすることもあります。ぜひ、私たちにもご相談ください。

最後に、子どものために何かしたいと思っている方へのメッセージをお願いします。

「子どものために何かしたい」という気持ちがとても大切です。最初は「私でもできるのかな」と躊躇するかもしれませんが、まずは一歩を踏み出して、できることから継続してやっていくことが大切です。行動を

最後に、子どものために何かしたいと思っている方へのメッセージをお願いします。

「子どものために何かしたい」という気持ちがとても大切です。最初は「私でもできるのかな」と躊躇するかもしれませんが、まずは一歩を踏み出して、できることから継続してやっていくことが大切です。行動を

毎月25日に開催する子ども食堂 地元企業や団体から提供された食材が大活躍

ニコニコ子ども食堂

阿波市にあるショッピングプラザアワーズの食堂で、毎月25日に開催されている子ども食堂。子どもは無料、大人は300円で利用でき、毎回用意された60~70食が完売する人気ぶりだ。

発起人の来田美晴さん(42・栃木県出身)は「子どもたちの食環境を整えつつ、忙しい家庭の助けになることをしたかったんです」と話す。自身の子どもにアレルギーがあり、子育てをするなかで食事や環境の大切さをより深く考えるようになった。子ども食堂では「野菜や味噌汁を美味しく食べてもらって健康になってほしい」とできるだけ無添加を心がける。イリコや鰹、昆布などから取った出汁で作る味噌汁や煮物が好評だ。現在は6人のボランティアスタッフと共に調理や配膳をし、子どもやその家族を迎えている。

食材は地元の企業や団体から提供されたものが大活躍。取材日の献立はロールキャベツ、ごはん、サ

ラダ、和え物、デザートで、JAグリーン土成マルシェの水菜、大幸食品の白菜やキャベツ、西測スレート工業所のレタスなどが使われた。また、来田さんが昨年から取り組む「こども食堂専用ファーム」で収穫した里芋の煮物も並び、訪れた人たちのお腹を満たした。

来田さんは「地域の人とのつながりを大切に、自立して継続していける子ども食堂にしていきたい。もっと開催日数を増やせるように人材や運営資金を確保していきたいです」と力を込める。



取材日の主菜は、ことごとスープで煮たロールキャベツ。



家族と食事を楽しむ子どもたち。



毎回、60~70食分が用意されている。



お揃いのピンクの三角巾を身に着けたスタッフ。前列左端が来田さん。「スタッフが楽しく取り組めるよう意識しています」。

【毎月25日開催】
阿波市阿波町伊沢田88-1
(ショッピングプラザ アワーズ内)
090-4604-6329
(電話受付は19:00まで)
18:00~20:00(売切まで)
大人300円、子ども無料
開設 2018年
Facebookあり

子どもが「自分で」やりたいことを決めていくデモクラティックな学校 親も子もみんなで育ちあっていく場所に

こどもっと.からふる

畑を駆け回る子どもたちの賑やかな声が響く「べんざいてんのうち」。子どもが自分でやりたいことを決めていくデモクラティックな学校で、公立学校に行くことを辞めた子や通わない選択をした小中高生の新しい形の学校として運営している。立ち上げたのは、中学校で教員をしていた代表の吉本真菜実さん



冒険ゲームをして遊ぶ子どもたち。大人と一緒に畑で思い切り駆け回る。

(上板町出身)と子どもの放課後の居場所を創りたいと思っていた山内瑠実さん(阿南市出身)だ。

この学校は「子どもたち一人ひとりが主語でいられる場所」。吉本さんは「大人が敷いたレールに乗せるのではなく、子どもたちがやりたいと思ったことをサポートする方が子どものためになると考えています」と話

す。子どもたちは朝のミーティングで「今日は何をするか」を相談して決める。ときには、1人500円の予算で昼食の計算をして買い出しにでかけることも。会話で出てきた言葉を辞書で調べ、その意味を学んでいく姿も日常の風景だ。山内さんは「子どもたちは毎日何もないところからやりたいことを見つけてそれをどうやるか考え、1日の終わりには周りの感想を聞いて心を動かしています」と微笑む。

「親も子ども、みんなで育ちあっていくこと」を大切にしている。例えば、親が持つ悩みや疑問を口に出し、互いの想いを聴き合う時間を設けている。3月5日には鳴門市の喫茶店「ろうそく夜」から「こころの保健室」と題してオンラインで開催する予定だ。吉本さんが進行役を務め、質問や相談を聴いて話題を深めてくれる。



(左から)山内さん、スタッフの米屋綾子さん、吉本さん。寄付型で運営できるように、無償で通える場所にすることを目標にしている。



建物から畑までが「べんざいてんのうち」の敷地。14時半以降は預かり保育をしている。

阿南市柳島町弁財天51
10:00~14:00
活動日は火曜、水曜、木曜
利用料 月1万2600円、1日のみ場合は2000円
駐車場 あり キッズスペース あり
多機能トイレ なし 開業 2014年
Wi-Fi なし
Facebook、Instagram、LINEあり